

---

# 夏子さん

雪芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏子さん

### 【Nコード】

N2751J

### 【作者名】

雪芳

### 【あらすじ】

夏子さんという話を知っていますか？

ああ、今日は暑いな。外に出ただけで肌がヒリヒリと痛いよ。地球温暖化も深刻だな。

でも今日は、地球温暖化より酷い話を伝えたくてね、お前を呼んだんだよ。長くなるけど、どうしても話したくて。

……いいかなあ？

ありがとう。

お前って本当にいいヤツだな。俺、お前が友達でよかったよ。

話しはね、そうだな、どこから話そうか。

うんと、いつも俺が話してる先輩がいるだろ、いつも飲みに連れていかれる。うん、そうそう、覚えてるならよかった。まあ、その先輩のことなんだけどさ。

この間、もう一週間も前のことなんだけどさ、その先輩と海に行っただよ。ほら、大学の国道を真っ直ぐ行くとある海。

あ、聞きたくなさそうな顔してる。

だよな、あそこは出ることで有名だもんな。そうそう、肝試しでさ。行っただよ。まあ、そんなに嫌そうな顔しないでさ、聞いてくれよ。

さっきも言ったけどさ。どうしても、お前に言いたいんだよ……。大丈夫、海に幽霊なんか出てこなかったんだって。

いいか？

それでな。肝試しに行ったはいいんだけどさ、ぜんぜん幽霊なん

て出てこなかったんだよ。本当の話。

よくさ、海沿いを歩いていると赤い帽子に赤いワンピースを着た女が立っててさ、海を指を指すって言うじゃん？ それで、指をさした方向をみる。

すると、その方向にゆっくり首がねじれて行って……。

そうそう、怖いよな。

だけど、実際はそんなのなくてさ。つまんないからって、すぐ帰ることにしたんだよ。

それでさ。帰り道のことなんだよ。

晩飯食べた後に行ったもんだから、あたりはもう真っ暗だったんだよね。まあ、そんなの構わずに先輩は車を飛ばしてて。俺は助手席に座っていたんだけどさ。

そしたらさ、だんだん、暗くなってきたんだよ。

いや、夜とか、そんなレベルじゃなくてさ。なんつーか、黒煙の中に入り込んだみたいな感じ。だんだん暗くなって……、ついに周囲がぜんぜん見えなくなっただ。。

なんだなんだって混乱したよ。先輩も急ブレーキ踏んでさ。すごい音たてて車がとまって。

でもさ、真っ暗で何も見えないわけ。だからさ、先輩はライトをつけたんだよね。

そしたらさ、後部座席に赤い帽子に赤いワンピースの女が……。

って、ウソウソ！ 冗談だって、なにビビってたよ！そんなわけないじゃん。

本当はライトなんかつけてないって。ま、先輩は、どうせ霧だろう、車はしばらく走れないけど気にしなくていいって言ってさ。霧が晴れるまでまつことになったんだ。

そしたらさあ、とつぜんこんなこと言い始めたんだ。

「夏子さんって知ってるか」って。

俺、そんな女知らないからさ、知りませんって言ったんだよ。そしたらさ、こんなこと言ったんだよ。

ある所に夏子さんっていう女がいたんだって。夏子さんは寂しがり屋で、いつも彼氏にべたべたしてたんだ。だけど、彼氏がそれに疲れたらしくて、分かれ話をきり出したんだって。

そしたら、夏子さんは逆上して彼氏に包丁を持ち出した。彼氏を刺そうとしたんだ。だけど逆に、夏子さんは彼氏に殺されてしまったんだって。

彼氏はそのことを三日悩んだ。捕まるのを恐れて、夏子さんを暫く冷蔵庫に閉じ込めて、三日悩んだ。

三日後、彼氏は夏子さんに何をしたと思う？

……バラバラにしたんだ。

首を切って、右腕を切って、左腕を切って、右足を切って、左足を切って。六つに分けたんだ。

そして、捨てた。

血にまみれた帽子とワンピースと一緒に、海に。  
夏の、海に。

もう気付いたか？

そうそう、あの海の幽霊の話だよ。でもさ、みんな、名前も、ど  
ういう幽霊かも詳しく知らないだろ？ ただ、海に赤い帽子と赤い  
ワンピースを着た女がいて、首を引き千切るって話だけ。

本当は、夏子さん、って言うらしいぜ。

俺はさ、なんで先輩が夏子さんってことを知ってるのかって疑問  
に思ったよ。だってさ、先輩は、そんなこと一度も話したことない  
からさ。

だから訊いたんだ。

そしたら、信じてなかったって言うんだよ。

んで俺は、何をですかってまた訊いたんだ。そしたらさ。

「夏子さん」

って先輩は答えたんだ。

俺はもちろん、えっ？ 聞き返したよ。

だけど先輩は、俺の話を見殺ししてこんなことを言ったんだ。

「夏子さんの話をきいたら、

三日以内に、

バラバラの体の数、

六人の人間に

夏子さんの話をしなければならぬ」

「もし六人の人に

話を出来なかつたら、

寂しがり屋の夏子さんは

体をバラバラにしに

やってくる」

「手始めに首を切つて、

次に、右腕を切つて、

次に、左腕を切つて、

次に、右足を切つて、

最後に左足を切つて。

殺す」

「殺しにやってくる」

俺は意味が分からなくて、先輩の肩を揺らしたよ。  
そしたらさ、先輩がこう呟いたんだ。

「お前で五人目なんだ」

それから、  
ゆっくり、  
先輩の首が

ねじれた。

気付くと、

俺の膝の上で、先輩の首が転がっていたよ。

そして次から次へと、先輩の体は、ねじれていったんだ。

「手始めに首を切って、

次に、右腕を切って、

次に、左腕を切って、

次に、右足を切って、

最後に左足を切って。

殺す」

俺は逃げた。

叫び声をあげながら。

車のドアを開けて、逃げた。

そして、見たんだ。



後部座席に座る、夏子さんを。

それから散々さ。

黒い霧はいつの間にか晴れていたけれど、夏子さんが追ってくるんじゃないかって気が気じゃなかったんだ。逃げて、逃げて、必死に逃げて……。

話はこれでおしまいだよ。

じゃ、俺は話が終ったし、帰るわ。

なんだよ、掴むなよ。

え？ 嘘をつくなって？

嘘だと思うなら、先輩について他のやつらに訊いてみるんだな。そしたら、なんでここ一週間、誰も先輩の話をしないか分かるだろうよ。

本気になるかしないかは、お前次第だよ。俺は知らないからな。だって……。

「お前で六人目だからさ」

(後書き)

夏といやホラーといつことば。2007年くらいに書きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2751j/>

---

夏子さん

2011年10月3日14時48分発行